

また、「JFA 熱中症対策^{*1}<A+B>」を講じた場合は、全ての種別において [Cooling Break^{*2}] または [飲水タイム] を推奨することとする。

■ WBGT=25℃以上の場合は、3・4種の試合は「JFA 熱中症対策^{*1}<A>」を講じた上で、以下の対応を行う。

3種… [飲水タイム] を行う。

4種… [Cooling Break^{*2}] または [飲水タイム] を行う。

▽体育館等の屋内でフットサル等の試合を行う場合も、上記と同じガイドラインを適用する。ただし、同じWBGT値でも屋外に比べて熱射・輻射が少ないが高湿度傾向にあるので、除湿機の設定や風通しを良くするなどの対策を講じる必要がある。また、建物自体に熱がこもるため日没後もWBGT値が下がりにくい傾向があることにも注意すること。

▽フットサルやビーチサッカー、8人制サッカーのような「自由な交代」が可能な試合にいつでも、ガイドラインに沿って [Cooling Break] や [飲水タイム] を設定する。

『Cooling Break^{*2}』

前後半1回ずつ、それぞれの半分の時間が経過した頃に3分間の [Cooling Break] を設定し、選手と審判員は以下の行動をとる。

- ① 日影にあるベンチに入り、休み。
- ② 水・アイスバツク等でカラダ（頸部・脇下・鼠径部）を冷やし、必要に応じて着替えをする。
- ③ 水だけでなくスポーツドリンク等を飲む。

<留意点>

- 原則として試合の流れの中で両チームに有利・不利が生じないようなアウトオブプレーのときに、主審が判断して設定する。
- 戦術的な指示も許容する。
- チームが、カラダを冷やすための器具を持ち込む際は、事前に大会運営責任者の了解を得る。
- 審判員は [Cooling Break] の時間を遵守するため、試合再開時には選手に速やかにポジションに戻るよう促すと同時に、出場選手の確認を行う。
- サブメンバ―は出場メンバ―との識別のため必ずピブスを着用する。運営担当者は試合再開時に出場メンバ―の確認について審判員をサポートする。
- [Cooling Break] に要した時間は「その他の理由」によって費やされた時間として前後半それぞれの時間に追加される。
- [Cooling Break] を設定する場合は試合前またはハーフタイム時のロッカーアウトまでに両チームに伝達する。また、WBGT値に応じて、前半と後半の対応が異なる場合がある。

(参考… 飲水タイム)

- 前後半それぞれ半分の時間を経過した頃、試合の流れの中で両チームに有利・不利が生じないようなボールがアウトオブプレーのときに、主審が選手に指示を出して全員に飲水をさせる。もっとも良いのは中盤でのスローインのときであるが、負傷者のための担架を入れたときや、ゴールキックのときも可能である。
- 選手はあらかじめラインの外に置かれているボトルをとるか、それぞれのチームベンチの前でベンチのチーム関係者から容器を受け取って、ライン上で飲水する。
- 主審、副審もこのときに飲水して良い。そのために第4の審判員席と、第2副審用として反対側のタッチライン沿いにボトルを用意する必要がある。
- スポーツドリンク等、水以外の飲料の補給については、飲料がこぼれて、その含有物によって競技場の施設を汚したり、芝生を傷めたりする恐れもある。大会主催者が氷以外の持ち込み可否及び摂取可能エリアについて、使用会場に確認をとって運用を決定するので、その指示に従って、飲水する。
- 飲水タイムは30秒から1分間程度とし、主審は選手にポジションにつくよう指示してなるべく早く試合を再開する。飲水に要した時間は、「その他の理由」により空費された時間として、前、後半それぞれに時間を追加する。
- 時間の経過に伴って環境条件がかなり変わった場合は、飲水を実施するかしないかの判断をハーフタイムに変更してよい。
- 飲水を行う場合は、試合前（あるいはハーフタイム時）に両チームにその旨を知らせる。
- 飲水タイムは、あくまでも飲水のためである。
- 飲水タイムとは別に、従来どおり、ボールがアウトオブプレーのときにライン上で飲水できる。

以上